

サイラスはヨブか

—— タイポロジーで読む『サイラス・マーナー』 ——

“My days are swifter than a weaver’s shuttle, and are spent without hope.”

(Book of Job, 7. 6)

栗 野 修 司

George Eliot の作品が聖書やキリスト教神話への言及やモチーフに満ちあふれていることはよく知られている。*Mill on the Floss* の洪水、*Middlemarch* のセント・テレサ、*Daniel Deronda* と *Felix Holt* のアポカリプス (Carpenter 55-103, Carroll 201-33) はその例であるが、*Silas Marner* については、作品全体のモチーフとして聖書やキリスト教神話と結びつけようという研究はこれまでなされていない。しかし、typology を道案内として『サイラス・マーナー』を読むと、このテキストが聖書と密接に結びついていること、特に作品中の出来事や人物造形が旧約聖書（ヨブ記、イザヤ記）を踏まえているらしいということが明らかになる。一方で、このテキストには1800年前後から数十年の間の、産業革命のまっただ中にあったイングランド中部の工業都市と、それより少し南の田園地帯の人びととそれを取り巻く環境が細密画のように描かれてもいる。『サイラス・マーナー』というテキストは、キリスト教とリアリズムという枠組みを持つだけではない。このテキストにはダーウィンの進化論の語彙がちりばめられてもいる。キリスト教とリアリズムと進化論を『サイラス・マーナー』の描く風景に読み取り、このテキストの新しい読みを提示したい。⁽¹⁾

I

Typology は聖書研究から派生した概念で、「予型論」、あるいは「予定論」

と訳され、「新約聖書に書かれてある出来事は旧約に予表されてあるという説」(研究社『新英和大辞典』第6版)と定義される。聖書にはその例としてゼカリヤ書が福音書のイエスのエルサレム入城の予型となっていることが示されている(Zechariah 9. 9 と例えば Matthew 21. 1-10)。⁽²⁾このタイポロジーは、18世紀半ばから、ヨーロッパでは広く行われたという。旧約聖書に描かれたことを type と呼び、それが予定したと考えられる新約聖書に描かれている出来事を antitype (浮き彫り模様を作るときの押し型刻印のこと、反感や対立を含意するわけではない)と呼ぶ。当初は定義通りに、「旧約聖書は新約聖書の出来事を予定する」という範囲にとどまっていたが、それがやがて、一般の事象にも拡大されて、大事件が起こるとそれが旧約聖書で既に予兆されているというこじつけの解釈がまかり通るようになった。1755年のリスボン大地震で、その原因を旧約のヨナ記に描かれた鯨(Jonah 1. 1-2. 10。ただしどのようなバージョンの聖書も“a big fish”とあるだけで、鯨と特定していない。大魚がいつから鯨に化けたのかというのは個人的には非常に興味深い問題だがここでは論じない。)に求めようというのはその顕著な例である。ヨナ記の記述がタイプで、リスボン大地震がアンチタイプだということになる。ヴォルテールが『カンディード (Candide, ou l'Optimisme)』(1758)の冒頭でこの神学的な地震論に言及している(287)のは、この時代にタイポロジーが広く行われていたことの証拠であろう。これよりよく知られているのが、ロマン派詩人たちがフランス革命を支持したときに、それが黙示録の予言するアルマゲドンであると信じたという例である(Jeffrey 241)。

エリオットのいくつかの作品は『カンディード』より少し後の時代を背景にしているが、タイポロジーが日常的だったという証拠をいくつも示している。例えば、*Adam Bede* (1859) はちょうど18世紀が終わろうという時代の出来事を描くが、そのヒロインの Dinah Morris がその日の予定を決めるのに、聖書をランダムに開いて、そこに書かれている記述を参考にするという場面がある(*Adam Bede* 77)。これは、聖書の記事のアンチタイプとして自分の日々の生活を見なすという、George Landow の言う「世俗化されたタイポロジー (secularized typology)」の日常化を示す例である(167-8)。

エリオットの作品は緊密な構成を高く評価されるが（例えば、Hardy 191）、『サイラス・マーナー』についても同様である。しかし、『サイラス・マーナー』の緊密な構成がタイポロジカルであることはこれまで見過ごされてきた。ランタン・ヤードの宗派に属していたときのサイラスを描く部分、それと対照される、ラヴィローでサイラスが経験した出来事を描く部分の二つに分けられて、それぞれ緊密に対応する構成を持つ。前者がカルビン主義の色濃い宗派で後者がアングリカン・チャーチであることは一致した意見であるが、言葉とイメージによる連想と、聖書を字句通りに解釈するかどうかという点で、前者が旧約聖書とつながる共同体で、後者は新約聖書とつながる共同体として描かれているということは指摘されてこなかった。そのことは、たとえば、ランタン・ヤードを描く際に、サイラスの母と死んだ妹の名前に言及して、二人の名前は Hephzibah で、旧約聖書の Isaiah 62.4 から採られている（“My Delight Is in Her” [English Standard Version 2001] 「望まれるもの」の意味）ことや、ランタン・ヤードでサイラスは盗みの罪を着せられるが、その疑いを晴らすために神籤による罪の判定を仰ぐことで暗示される。神籤を引いて、サイラスの罪を決めるという出来事は聖書を知らない読者だったら、この教会が蒙昧無知な信徒の集団と決めつけかねないが、旧約聖書をよく知る人には、すぐにこの出来事が、「くじは膝の上に投げるが、ふさわしい定めはすべて主から与えられる（“The lot is cast into the lap; but the whole disposing thereof is of the Lord.”）」(Proverbs 16.33) という箴言の一節を踏まえたものだと分かるであろう。旧約聖書は神の絶対性を規定しているが（十戒など）、ランタン・ヤードの Dissenters も神の絶対性を信じる人たちだったのである。一方、サイラスのため込んだ金貨が盗まれるというラヴィローで起きた出来事は、新約聖書の天に富を積みなさいというキリストのいさめ「盗人が忍び込むことも盗み出すこともない（“But lay up for yourselves treasures in heaven, where neither moth nor rust doth corrupt, and where thieves do not break through nor steal.”）」(Matthew 6.20) に対応する。このように旧約聖書と新約聖書への言及や連想を巧みに用いて、『サイラス・マーナー』の構成は旧約聖書と新約聖書の対比を浮かび上がらせている。このことはテキストをタイ

ポロジカルに読むとさらに明らかになる。

旧約聖書と新約聖書をそれぞれタイプ、アンチタイプとして読むことができるように、『サイラス・マーナー』のふたつの構成要素ーランタン・ヤードとラヴィローーを、それぞれタイプ、アンチタイプとして読むことができる。両方で盗み（前者ではサイラスが「盗み」、後者ではサイラスが盗まれる）が起こり、それに関わる極悪人もそれぞれにひとり登場するが、その共通点として運任せ、偶然頼みを指摘できる（Shuttleworth 207）。裏切りもランタン・ヤードとラヴィローーではタイプ/アンチタイプとして予兆され、ランタン・ヤードでのサイラスが婚約者の裏切りに遭うというタイプは、ラヴィローーではゴドフリーが婚約者を裏切るという形のアンチタイプとして描かれる。サイラスの“fit”も、ランタン・ヤードで予兆された通り、ラヴィローーでも起こる（56, 167）。この“catalepsy”「強硬症」（精神的疾患からくる、感覚がなくなり筋肉が硬直した状態）については、「過度にメロドラマ的な仕掛け」（Cohen 413）という批判もある。しかし、ランタン・ヤードとラヴィローーの構成の対比を考慮すると、むしろ緊密な構成を強化するという意味で、この強硬症を肯定的に見ることが可能である。タイポロジカルには、ランタン・ヤードの出来事はラヴィローーでの出来事を予兆し、それによって、『サイラス・マーナー』は緊密な構成を獲得していると読むことができる。

タイポロジーを援用して『サイラス・マーナー』を読むと、旧約聖書、新約聖書、『サイラス・マーナー』という3つのテキストが緊密に結びつきながら、『サイラス・マーナー』が新しい意味を産み出す。たとえば、実の父であるゴドフリーに捨てられ、サイラスに拾われて育てられる赤子にサイラスはヘプシバ（Hephzibah）という名前を付ける。これは「望まれるもの」という意味だが、この赤子が父親に捨てられたこと、この赤子の存在が明らかになるとナンシーとの婚約が破綻しかねないとゴドフリーが恐れたことなどを考えると、「望まれるもの」という名前は皮肉でしかない。しかし、これをタイポロジカルに読むと皮肉でなくなる。自分で育てることに決めた赤ん坊にサイラスが母と妹の名前を付け、その愛称の Eppie で呼ぶ。エピーはやがて成人して幼友達と結婚するというプロットは旧約聖書で予兆されている。イザヤ書の62章は

シオンの回復についての予言で、そこにヘブシバの名前を見ることができる—

Thou shalt no more be termed Forsaken; neither shall thy land any more be termed Desolate: but thou shalt be called Hephzibah, and thy land Beulah: for the LORD delighteth in thee, and thy land shall be married. (Isaiah 62. 4)

(King James Version)⁽³⁾

You shall no more be termed Forsaken,
and your land shall no more be termed Desolate,
but you shall be called My Delight Is in Her,
and your land Married;
for the LORD delights in you,
and your land shall be married.

(English Standard Version)

あなたは再び「捨てられた女」と呼ばれることなく
あなたの土地は再び「荒廃」と呼ばれることはない。
あなたは「望まれるもの」と呼ばれ、あなたの土地は「夫を持つもの」と
呼ばれる。

(新共同訳聖書)

イザヤ書の記述は、『サイラス・マーナー』のプロットと重なり、二つのテキストをタイポロジカルに読むことも可能である。父（ゴドフリー・カス）に捨てられた幼子がサイラスに拾われ、育てられる。彼女は「捨てられた女」とはもはや呼ばれない。そして、幼友達で隣人のアーロンと結婚する。注目してよいのは、シオン（“thou” [KJV], “you” [ESV]）の delight のエコーを『サイラス・マーナー』に聞くことができるという点である。ゴドフリーとナンシー夫婦に彼女の出自を明かされて、二人と一緒に暮らそうと言われた時のエピソード

一の返事の中にそれが出てくる—

“Thank you, ma’am—thank you, sir, for your offers—they’re very great, and far above my wish. For I should have no *delight* i’ life any more if I was forced to go away from my father, and knew he was sitting at home, a-thinking of me and feeling lone. We’ve been used to be happy together every day, and I can’t think o’ no happiness without him.” (233; my italics)

「お申し出有り難うございます、奥様、有り難うございます、旦那様。あまりにももったいないお申し出で、思いもよらぬほどです。でも、父と引き裂かれて、私のことを思いながら寂しげに、父が一人、家にぼつねんと座っているだろうと知れば、どうして私に毎日の生活に喜びを見いだせましょう。父と私は一緒にいてずっと幸せでした、ですから父なしの幸せなど考えることができません。」

この引用部分が親と子の関係について語られていることに注目したい。というのは、それによって、旧約聖書、新約聖書、『サイラス・マーナー』は親子名乗りで結びつき、三つのテキストで「喜び」という単語が響きあうからだ。マタイによる福音書の神とイエスの「親子名乗り」には（*delight* ではないが）*pleased* という単語が使われている—「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（“This is my beloved Son, in whom I am well *pleased*.” [KJV; Mat. 3. 17]; my italics）。親子名乗りと「喜び」という単語によって、イザヤ書が福音書を予兆し、さらに『サイラス・マーナー』を予兆しているのである。

それのみではない。イザヤ書の「あなた」がエピーを予兆するならば、「あなたの土地」はサイラスを予兆することになる。イザヤ書に「あなたの土地」（ここではカナン）が *desolate* だと書かれていることと、『サイラス・マーナー』でサイラスはエピーを得るまでは *desolate* であったと告白していることと対応する—

On the table near them, lit by a candle, lay the recovered gold—the old long-loved gold, ranged in orderly heaps, as Silas used to range it in the days when it was his only joy. He had been telling her how he used to count it every night, and how his soul was utterly *desolate* till she was sent to him. (226; italics mine)

二人のすぐそばの机の上に、ろうそくに照らされて戻ってきた金貨があった。以前サイラスが長いこと愛してやまなかった金貨が、きちんと積み重ねられていた。それはちょうどサイラスが、それが唯一の楽しみだった頃きちんと積み重ねていたのと一緒にであった。毎晩毎晩どのように数えていたかをエピーに話してきた、彼女が自分のとろに送られてくるまでどんなに自分の魂が孤独であったかということも。

このようにして、イザヤ書は『サイラス・マーナー』のプロットを見事に予兆する。ランタン・ヤードの教会が会衆派 (Congregational Church) であったことは論者の一致するところであるし (Swinden 35)⁽⁴⁾、会衆派は広義にはピューリタン一派であるが、イザヤ書がイエス・キリストが旧約聖書で予言された救世主であることを予兆しているという理由で、ピューリタンはそれを最も好んで読んだそうである。預言者イザヤの説くところの中心をなすのは “righteousness” と “justice” であるそうだ (Gentrup 318)。絶対的な智による「正義」を信じる人たちが、神意の表れとしてくじ引きを選んだことは、だから少しも不自然ではないし、狂信的であるとか非科学的であるとかいう批判は当たらない。ラヴィローでも人々は絶対的な善による「勧善懲悪」という民衆信仰として、神の正義を信じていたが、それは『サイラス・マーナー』の結末で「実現」されている。自分を捨てた生みの親ではなく、拾い上げて育ててくれた「親」をエピーが選ぶ場面がそれに当たる。テキストの比較的前の方に置かれた、「この世を正しく治める神はいない (“there is no just God that governs the earth righteously”)」(61) という、サイラスが絶望して神を見限る言葉と対応して、「神は私によいことをなされた (“God was good to me.”)」(226) という、テキストの最後の方に置かれたサイラスの言葉は、信

仰を取り戻した彼が神の正義を再確認する言葉でもある。

II

「わたしの一生は機の梭（ひ）よりも速く、望みもないままに過ぎ去る（“My days are swifter than a weaver’s shuttle, and are spent without hope.”）」（Job 7. 6）というヨブの嘆きは、ヨブ記と『サイラス・マーナー』との接点であり、分岐点でもある。サイラスは機織り（weaver）である。神に与えられた試練によって、彼の身体は蛆虫とかさぶたで覆われ、皮膚はひび割れうみが出る。それに耐えながら、神を信じながら、しかし、ヨブは絶望し、自分の人生を機の梭に例える。それでも彼は問いただすことを止めない―「人間とは何なのか。なぜあなたはこれを大いなるものとし、これに心を向けられるのか（“What is man, that thou shouldest magnify him? and that thou shouldest set thine heart upon him?”）」（7. 17）。ここに見られるように、『サイラス・マーナー』の特徴として指摘できるのは、神と人との関係を再確認し、定義づけようとする姿勢である。「なぜわたしをとがめ立てし、過ちを追求なさるのですか。私が悪しき者でないのを知りながら、あなたの御手から私を救う者はないのを知りながら（“That thou inquirest after mine iniquity, and searchest after my sin? Thou knowest that I am not wicked; and there is none that can deliver out of thine hand.”）」（10. 6-7）が示すように、ヨブは頻繁に神と自分との関係を問いただす。「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ（“the LORD gave, and the LORD hath taken away; blessed be the name of the LORD.”）」（Job 1. 21）という、よく知られた一節も、支配と従属の関係によって神と人とを規定している。この点が『サイラス・マーナー』に描かれている神と人との関係と微妙にずれている。「神は私の身の証を立ててくださる（“God will clear me.”）（59）とか、「神は私によりことをなされた」（226）のように、自分と神との関係を確認し、定義しようという言説がしばしばなされるが、ヨブ記に見られる、絶対的な智（“him which is perfect in knowledge” [Job 37. 16]）、あるいは絶対的な善（“he is

excellent in power, and in judgment, and in plenty of justice: he will not afflict.” [37. 23]) ではなく、『サイラス・マーナー』では曖昧な存在である。例えば、ラヴィローの人々は神を「何か偉大で神秘的 (something great and mysterious)」(141) な存在としてとらえている。ヨブ記のヨブをサイラス・マーナーのタイプとして読むとこの違いはさらに明らかになる。

聖書を支配するのは目的論 (teleology) である (ライブニッツもこの世界に目的論的な事象を多く見て、予定調和を唱えた)。世界は終末へと向かい、その先には神の国が約束されている。しかし、『サイラス・マーナー』が描くのは、目的論の介在の余地がない、偶然の支配する世界である。ヨブとサイラスの比較がそのことを明らかにする。ヨブは忍耐強いと新約聖書の作者 (James 4: 11) も称えるその忍耐強さをサイラスも持っていたのか。ヨブは数々の試練に遭いながらも、神を疑い、信仰を失うことはなかったのに、ヨブは同じ教会に属する信徒の裏切りに幻滅して、その結果 (その人たちではなく、) 絶対の智、真理を知りそれによって人を裁くはずの神を疑い、信仰に背を向ける。この時点で彼は、神がヨブに与えた警告、「主を畏れ敬うこと、それが知恵であり、悪を遠ざけることが分別である (“the fear of the Lord, that is wisdom; and to depart from evil is understanding.” [28. 28])」に背いていることになる。この点でサイラスはヨブではなく、『サイラス・マーナー』の「神」もまたサイラスにいかなる警告も与えなかった。彼はランタン・ヤードを去り、ラヴィローに移り住む。そこで金の信者となるに至っては、とてもヨブとは比較にならない。さらに彼には試練が襲う。貯めた金貨が盗まれるのである。それとは入れ替わりに、エビーが彼の「養女」となるのは、不信心なサイラスへの神の応答であり、救済であったとヨブ記に依拠して解釈する人もいるかもしれない。しかし、このテキストの描く世界は、目的によって秩序立てられてはいない。「偶然 (chance)」に左右される出来事が多く含まれているのである。これを神の意志と読むのにはちょっと無理がある。ラヴィローの人々には、神の意思は偶然と混同して理解されているのである。エビーの役割を *dea ex machina* (「演劇・小説などで突然に現れて、もつれた事件や困難を強引に解決する人物・出来事・超自然的な力、急場しのぎの解決策」『新

英和大辞典』)と考える人たち (Dunham 645) は、神の摂理 (Providence) よりも偶然 (chance) の働きに注目して『サイラス・マーナー』を読む人であろう。

神の摂理は目的論によって説明可能であり、偶然はそれと無関係である。しかし、この二つは対立するように見えて、実はそうではない。Gillian Beerによれば、ヴィクトリア朝の読書階級にとって神話 (キリスト教神話を含む) と自然科学 (生物学を含む) は相容れない関係ではなく、置き換え可能な関係で、「進化論は新しい形の探求神話 (quest myth) になる可能性がある」(Darwin's Plots 128) と考えられたという。科学と神話との間に明確な境界線を引くことの不可能性に気づいたエリオットが偶然に関心を向けた理由を、偶然による突然変異を、個体が生息環境に適応するかしないかを決める要素であるとダーウィンが主張していることにあとでピアは言う (Darwin's Plots 126-7)。ダーウィンの『種の起源』の2年後に『サイラス・マーナー』は出版されているから、エリオットがダーウィンから影響を受けていると考えることには無理がない。

ダーウィンの進化論によれば、継続と断絶を分けるのは偶然であるとされる。『サイラス・マーナー』の登場人物は偶然を神の摂理と混同して使っている。このテキストは、偶然に助けられて悪を行う人を複数描き、その一方で、神の摂理を盲信する村人を描く。そして、まるで後者が正しいと思わせるかのようには、勧善懲悪の結論 (ライブニッツの表現を借りるならば、「予定調和」⁽⁵⁾) が用意されている。ゴドフリーは自分の子供を妊娠している女の存在を隠したままナンシーと結婚することを決めるが、そのときの彼の心理を、「不都合な結果から彼を救ってくれそうな何か目に見えない運命の展開、何か好ましい偶然 (He fled to his usual refuge, that of hoping for some unforeseen turn of fortune, some favourable chance which would save him from unpleasant consequences—perhaps even justify his insincerity by manifesting its prudence.)」(126) を当てにしていると語り手は書く。しかし、「偶然と呼ばれる悪賢い複雑な存在 (cunning complexity called Chance)」(127) は彼の期待を裏切る。この結果は、神の絶対性を再確認し、同時にヨブの忍耐と信仰

の強さをも再確認する旧約聖書や新約聖書の言説とは明らかな一線を画している。たとえば「ヤコブの手紙」の一節はヨブを忍耐強い人として称え、彼が試練を受け、それを克服したこと、その彼を神が祝福したことを述べている――

“Behold, we count them happy which endure. Ye have heard of the patience of Job, and have seen the end of the Lord; that the Lord is very pitiful, and of tender mercy.” (James 5. 11)

「忍耐した人たちは幸せだと、私たちは思います。あなた方は、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く憐れみに満ちた方だからです。」

この一節に示されているように、ヨブには全能の神に対する強い信頼があり、目的論の支配する世界に住む彼の人生が「偶然」によって左右されることはありえなかった。『サイラス・マーナー』にはそのような存在は措定されていない。それどころか、神の存在はあくまで曖昧である。

そのことを証明するために、この作品で使われている mysterious という単語に注目してみよう。サイラスがエビーを見た最初の瞬間に彼は金髪のエビーを盗まれた金貨と思い込む――「金貨だ、彼の金貨だ、不思議なことにそれが戻ってきたのだ、それが盗まれたときと同じように (“Gold!—his own gold—brought back to him as mysteriously as it had been taken away!”) (167)。この引用の mysteriously は『サイラス・マーナー』を理解するキー・ワードである。ここでサイラスは、お金が消えたことと、金髪の赤ん坊が現れたことを「不可解だ、不思議だ」と考えている。つまり、彼は人間には理解不能な原因、あるいは理解不能な存在の働きによって、お金が消え、赤ん坊が現れたと思い込んでいるだけで、神の介在を明言していない。彼を取り巻く「不思議」には、どうやら神は介在していないようだ。ラヴィローの人たちも人間の運命は人間が決めるものではないという運命観を持っていたと書かれている。ゴドフリーとナンシー夫婦が、好条件を提示したにもかかわらず、サイラスにエビーの引き渡しを断られたときに、ナンシーは「神の摂理だ」と考えている――

「私はもう二度と幸福にはなれませんわ。あなたにはおつらいことでしょうけど、私にはそれほどではありません。だって、それが神様の意思なのですから（“I should never be happy again. I know it’s very hard for you—it’s easier for me—but it’s the will of Providence.”）」(217)。ナンシーの考えに見られるように、『サイラス・マーナー』の登場人物はあるときは神の摂理を、またあるときには偶然の働きを、自分に都合よく解釈し、自分の行為を正当化し、不幸を当然の報いとして、諦観する。こうして、神の存在を信じながら、しかし、その意図や絶対性には信頼を置いていない人たちをこのテキストは描いている。神の摂理と偶然とは明確な境界線を引くことなく、登場人物の都合のよいように解釈され、使われているのである。

ダーウィンの語彙には inheritance（『進化論』出版当時の読者は、継承という意味と遺伝という意味を明確に区別して読んでいなかった）という単語も含まれる。『サイラス・マーナー』は、『種の起源』全体で68回使われるキー・ワードである inheritance を連想させる、適者生存の理論を暗示するような織工の描写から始まる—

In the days when the spinning-wheels hummed busily in the farmhouses—and even great ladies, clothed in silk and thread-lace, had their toy spinning-wheels of polished oak—there might be seen in districts far away among the lanes, or deep in the bosom of the hills, certain pallid undersized men, who, by the side of the brawny country-folk, looked like the remnants of a disinherited race. (51; my italics)

どの農家でも紡ぎ車が忙しく音を立てていて、高貴な奥様方も、絹やレースの着物をまとい、磨かれた櫓の木製のおもちゃの紡ぎ車を持っていた頃のこと、遠く離れた土地の田畑の小道や丘に囲まれた場所で、青白い顔色の背の低い人たちを見たものだった。その人たちは筋骨たくましい農民と並ぶと、存在の権利を奪われた種族の生き残りのように見えた。

disinherit は「〈嫡出子を〉廃除する；…から相続権を奪う」（『新英和大辞

典』) という意味で、この文脈では、disinherited race はサイラスを含む職工たちを指し、彼らが産業革命の結果、機械によって職を奪われた状況を表現している。この後も『サイラス・マーナー』では、disinheritance という単語の響きを聞くことができる。例えば、ナンシーとの結婚を最優先するゴドフリーは、エピーは自分の生物学的な親を拒否して、やがてエピーと呼ばれる赤子を disinherit するし、テキストの最後では、エピーが育ての親のサイラスの「養女」となって、みずから disinherit されることを選ぶ。

ダーウィンの進化論は、種の進化の可能性と絶滅の可能性、言い換えると継続と断絶の可能性を人々に教えた。Inheritance と disinheritance とはそれを象徴する単語であるが、『サイラス・マーナー』にも継続と断絶のテーマを発見できる。「意識の不思議な硬化と途切れは、一時間かそこら続いて、死と誤解されたのだった (a mysterious rigidity and suspension of consciousness, which, lasting for an hour or more, had been mistaken for death)」(56) と描かれるサイラスの強硬症はしばしば起こり、断絶の効果的な例となっている (Cohen 419)。継続の中に断絶があるという効果的な提示は、サイラスが30年を経て再訪するランタン・ヤードが「絶滅」していたという、テキストの終章の前に置かれる章に描かれること―「ランタン・ヤードはなくなってしまった (“Lantern Yard’s gone.”) や、「故郷は一掃されてしまった (“The old place is all swep’ away.”)」(240)―によって強調されている。監獄だけが昔のまま残り、それ以外に昔を偲ばせるのは地名のみ。その代わりに大工場と広い道路が新しく造られていたランタン・ヤードを、エピーは「暗くて醜い場所 (a dark ugly place)」(239) と呼ぶ。この新しい風景は産業革命による都市改造の結果を描いているが、この断絶の風景には、ダーウィンの語彙と思想が密かに忍び込んでいるのである。

III

『サイラス・マーナー』にはワーズワスの「マイケル」の一節がエピグラフとして掲げられている―

“A child, more than all other gifts
That earth can offer to declining man,
Brings hope with it, and forward-looking thoughts.”

子供というのは、晩年にさしかかる男にとって、
現世で得られるどのような恵みにも勝る、
希望と前向きを考えをもたらししてくれるのだ。

このエピグラフが示唆する通り、ワーズワスの詩とエリオットの小説には、父子の関係など類似点が多く、「愛が強いこと、無私で無欲なこと、包容力の大きさ」が両者に共通している (Rignall 452)。エビーがサイラスに、「希望と前向きを考え」をもたらししたことにも異議を唱える読者はいないだろう。しかし、このエピグラフとタイポロジーを参考に『サイラス・マーナー』を読むと別の読みが生まれる。ヨブは災いの後に140年生き、子、孫、四代の先まで見ることができたそうだから (Job 42. 16)、災難に遭った時に晩年にさしかかっていたとは言えまい。しかし、サイラスは実年齢よりも老けて見えるなど、declining の兆候はいくつも示されている。何よりも、サイラスにはヨブのような長寿は約束されていない。この点で、ヨブはサイラスを予兆していない。ファンタジーや寓話として読まれることもあり、その結論はハッピー・エンディングであるとされる『サイラス・マーナー』であるが (Beer, *George Eliot* 125-6)、「マイケル」を踏まえて読み直すと別の読み、つまり、リアリズム小説（たとえば子を持たない夫婦の老いについて）としての読みが可能になる。

一般的には、a declining man はサイラスを指すと考えられているが、ゴドフリーは実の娘をサイラスの子として育てさせたまま老いを迎えるから、彼にも当てはまる。いやむしろ、彼にこそ当てはまると言ってよい。エビーとその婚約者のアーロンとの、幸せな老後が約束されたサイラスとは正反対の老後をゴドフリーは歩むであろう。ジョージ・エリオットはほとんどの小説で、幸福を約束されたものとそうでないものを提示して、それを終わらせている。まるで、幸せの総量が決まっていて、すべての人が幸せになるのにはその量は不足であると言わんばかりである。これが彼女のリアリズムであるのだろうが、聖

書でキリストがパラドックスによって示唆した現実（山上の垂訓の「貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである」[Luke 6. 20] など）、さらには『カンディード』でカンディードの哲学の恩師バングロスが「個々の不幸は全体の幸福をつくり出す」（283）という、楽天主義の詭弁によってしか説明し得なかった現実を、エリオットなりに文学で表現したと見てよいであろう。

Realism は1817年の造語であり、ジョージ・エリオットの作品はリアリズム小説としては最初期のものと見なされる。しかし、『サイラス・マーナー』のリアリズムは、その日本語訳、「写実主義」が想起させる意味とはほど遠い。ラヴィローの酒場の客は職人と商人（肉屋、蹄鉄工、車大工、仕立屋）で、普通の労働者はラヴィローには登場しない。苦役を連想する場面も登場人物も描かれない。『サイラス・マーナー』はナポレオン戦争とほぼ同時代に作品の背景が置かれていて、この時代には安い小麦の輸入が止まり、その結果パンの値段は上昇したが、労働者の賃金は同じようには上がらなかったために「非常な窮乏」を労働者階級にもたらした（Mokyr 451）。しかし、そういう現実もラヴィローの住民にはよそ事のように見える。経済的窮乏と隣り合わせの登場人物を描くトマス・ハーディの作品とは大きく異なっている。労働者階級の貧困や苦役を詳細に描く「リアリズム」とは一線を画していても、『サイラス・マーナー』はリアリズム小説の資格を持っている。この小説は1861年に出版されるが、その6年後に第一巻が出版される『資本論』はそれほど遠くない。マルクスが富の総量の限界について述べた一節、「一方の極における富の蓄積は、同時に、その対極における、すなわちそれ自身の生産物を資本として生産する階級の側における、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積である」（第1部第7編第23章第4節 [231-2]）は、富を幸福と置き換えただけで、エリオットの小説に当てはまるからである。（ただし、エリオットは、労働者階級をマルクスほど「持たざる者」とは見えていなかった。「道徳的墮落」についても、労働者階級全般のものとは考えていなかった。）富も幸福も社会全体には公平に行き渡らないという、当時の現実を洞察する鋭い視線、この時代の人間の叡智や政治の限界、経済状況などを見通す力を持つものだけに可能

なりアリズムに徹した視線、では、エリオットはマルクスと同じレベルにあった。

サイラスが終の棲家を構えることになった Ravelow は a relove 「愛の再来」のアナグラムとして読むことができる。このアナグラムの示唆通りにこのテキストを読めば、『サイラス・マーナー』の結論に同時代の批評家たちが見て、賞賛した poetic justice—サイラスが、失ったもの（金貨）よりも価値あるもの（エピー）を最後に与えられ、ゴドフリーは自分の過失に対して、実の娘を人手に渡すという罰を与えられるが、それを甘受しつつ、サイラスとエピーを庇護することによって罪の償いをするという結末（Rignall 383）—が妥当であるということになる。これによって、『カンディード』は楽天主義を否定しているのに対して、『サイラス・マーナー』は楽天主義を肯定しているとも考えることもできるかもしれない。しかし、この読みは、『サイラス・マーナー』という、小品であっても、読者にとって challenging な読みを可能にするテキストを単純化することになる。タイポロジーや進化論を援用して読み直すと、このテキストがこれまでの評価を覆すような多様性を持っていることが明らかであるからだ。

注

- (1) 本論文は、平成23年度佛教大学特別研究費と科研費（課題番号 22520276）による研究成果である。
- (2) 「シュロの聖日 (Palm Sunday)」は、キリストがエルサレムに入ったとする日を記念する。Easter 直前の日曜日に祝われる。キリストがロバに乗って、エルサレムへ入城するという福音書の記述する出来事の「タイプ」がザカリヤ書に示されている (9. 9) 「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。」
- (3) ジョージ・エリオットが読んでいたのは King James Version で、1611年の発行以来、English Revised Version が1881-85年に発行されるまで、英訳聖書の唯一のものと言ってよかった（他には Geneva Bible などがあった）。English Standard Version は、1901年に出版された American Standard Bible を元に、それを改訳し1946年に出版された。英国国教会が正式の聖書として認定したので、これも欽定版聖書と見なすことができる。固有名詞にヘブ

ライ語をそのまま使っていることに見られるように、KJV は対象を読書階級に特化した聖書であった。ESV は、一般大衆を対象にして、読みやすい、日常語を使っている。

- (4) ランタン・ヤードの教会が民主的であったことはそれを裏付ける理由の一つである。対照的にラヴィローでは、国教会の教区の現実を反映して、階級制度が存在しているので、教会内の会衆席が富や階級によって区別されている。
- (5) 「ライブニッツが過ちを犯すことはありえないばかりか、しかも予定調和はこの世で最もすばらしいものであり、充滿と微細物質と同様に善であるからだ」(『カンディード』446)。

Works Cited

- Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. 1983. London: ARK, 1985. Print.
- . *George Eliot*. Brighton: Harvester P, 1986. Print.
- Carpenter, Mary Wilson. *George Eliot and the Landscape of Time: Narrative Form and Protestant Apocalyptic History*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1986. Print.
- Carroll, Robert and Stephen Prickett, eds. *The Bible: Authorized King James Version*. The World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1997. Print.
- Cohen, Susan R. "'A History and a Metamorphosis': Continuity and Discontinuity in *Silas Marner*." *TSL* 25 (1983): 410-26. Print.
- Darwin, Charles. *On the Origin of Species*. 1859. Ed and introd. Gillian Beer. 1996. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- Dunham, Robert. "'*Silas Marner* and the Wordsworthian Child.'" *Studies in English Literature, 1500-1900* 16. 4 (1976): 645-59. Web.
- Eliot, George. *Adam Bede*. 1859. Ed. Stephen Gill. Harmondsworth: Penguin, 1980. Print.
- . *Silas Marner: The Weaver of Raveloe*. 1861. Ed. Q [ueenie]. D. Leavis. London. Penguin, 1985. Print.
- Gentrup, William F. "Isaiah." *A Complete Literary Guide to the Bible*. Ed. Leland Ryken and Tremper Longman III. Grand Rapids: Zondervan, 1993, 310-23. Print.
- Gladson, Jerry A. "Job." *A Complete Literary Guide to the Bible*. 230-44. Print.
- Hardy, Barbara. "Mrs Gaskell and George Eliot." Vol. 6 of *Penguin History of Literature*. Ed. Arthur Pollard. 1969. London: Penguin 1993. 172-

97. Print.

Hinojosa, Lynne Walhout. "Religion and Puritan Typology in E. M. Forster's *A Room with a View*." *Journal of Modern Literature* 33. 4 (2010): 72-94. Web.

Jeffrey, David L. *Dictionary of Biblical Tradition in English Literature*. Grand Rapids: Eerdmans P, 1993.

Landow, George P. *Victorian Types, Victorian Shadows: Biblical Typology in Victorian Literature, Art, and Thought*. Boston: Routledge, 1980. Print.

Mokyr, Joel. *The Enlightened Economy: An Economic History of Britain, 1700-1850*. New Haven: Yale UP, 2009. Print.

Rignall, John., ed. *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.

Shuttleworth, Sally. "Silas Marner: A Divided Eden." *The Mill on the Floss and Silas Marner*. New Ccasebooks. Ed. Nahem Yousaf and Andrew Maunder. London: Palgrave, 2002, 204-24. Print.

Swinden, Patrick. *Silas Marner: Memory and Salvation*. New York: Twayne, 1992. Print.

Westneat, David F. and Charles Fox. *Evolutionary Behavioral Ecology*. Oxford: Oxford UP, 2010. Print.

ヴォルテール 「カンディードまたは最善説」、『「カンディード」他五編』、植田祐次訳、岩波書店、2005. 261-459.

マルクス、カール 『資本論』、全9巻のうち第3巻、向坂逸郎訳、1969、岩波書店、2009.